『年報　地域文化研究』
第 22 号（2018 年）
2019 年 3 月 31 日発行

ドゥルーズ『差異と反復』における ライプニッツ哲学の活用
――〈理念〉・可能世界・副次的言説[1]――

飯野　雅敏

はじめに

本稿は、初期ドゥルーズの主著『差異と反復』（1968 年）[2] におけるライプニッツ哲学の受容過程の一端を解明しようと試みるものである。具体的には、〈理念〉と「副次的言説」という概念の形成に際して、ライプニッツ哲学（とりわけ可能世界論）が活用されていることを明らかにしたい。

初期のドゥルーズ哲学は、スピノザ、ニーチェ、ベルクソンの重大な影響のもとで形成された。他方で、1988 年にライプニッツ論『襞――ライプニッツとバロック』[3] が著されているように、ライプニッツもまたドゥルーズの哲学において重要な地位を占めている。とはいえ、スピノザ論やベルクソン論が初期の 60 年代に刊行されているのに対し、ライプニッツ論は後期の 80 年代に刊行されているため、この哲学者への関心は比較的遅くに生じたような印象が抱かれているかもしれない。

しかしながら、英語圏の研究を中心に、初期の著作群においてすでに、前三者に劣らずライプニッツが重要であることが指摘されてきた。トム・コンリーは、スピノザらと同様に「さらにそのうえライプニッツも、ドゥルーズの著述全体の中でいつも勢い強い力であり続けた」[4] と述べている。ダニエル・W・スミスも、「ドゥルーズが、『襞』と題されたライプニッツについての一巻に及ぶ研究書を自らのキャリアの晩期に刊行したとはいえ、彼のライプニッツとのより深い（ことによるとより重要な）かかわり合いは、『差異と反復』（1968 年）と『意味の論理学』（1969 年）においてすでに現れていた」[5] と評している。本稿の議論は、まさにこうした指摘を踏まえたものである。

スミスによれば、「ライプニッツはドゥルーズに個体化の諸問題と〈理念〉の理論を通じてある思考の方法を与えた」[6]。後述するように、「個体化」と「〈理念〉」とは、『差異と反復』の根幹をなす主題である。とはいえスミスは、これらの主題がこの著作に固有の議論の枠組みのなかでライプニッツ哲学とどのようにかかわり、どのような意義をもつのかを示していない。彼の論考はそもそも、この著作と問題構成の全く異なる「1980 年の講義で提示された推論にきっちりと従う」[7] としており、『差異と反復』本文への言及もほとんどない。さらに「個体化」に

関しては、『差異と反復』と『意味の論理学』でその位置付けが異なるにもかかわらず、区別がなされていない[8]。スミス同様に、ライプニッツ受容を扱った近年の論集（2010 年）に収められた多くの論考も、著作横断的な分析を試みるものが多く、各著作の固有性があまり意識されてこなかったように思われる[9]。しかしながら、鈴木泉の述べるとおり、ドゥルーズ哲学にあって「数多くの著作群は、異なった概念群からなるそれぞれに緩やかなシステムを提示し、また、著作ごとに力点の置き場所とシステムの内実を微妙に変更している」[10] ことに注意する必要がある。一般にドゥルーズ哲学の諸概念・主題には、著作を横断した緩やかな一貫性が認められることが多いものの、著作ごとにその内実や定義が微妙に変化しているのだ。本稿はこの指摘を重視し、著作ごとに異なる哲学の「システム」に即すかたちで、『差異と反復』固有の諸概念・主題を扱うことにしたい[11]。

さらに、ここで本論の扱う主題をより限定したい。ライプニッツ哲学が『差異と反復』における個体化論と〈理念〉論の中に取り込まれているというスミスの総評は、この著作の「結論」でライプニッツ哲学の特徴が列挙される際に「〈理念〉についての彼の着想」[12] が筆頭に挙げられ、「個体化」とライプニッツが特権的に結びつけられていることからも的確である[13]。本稿で扱うのは前者の〈理念〉であるが、その詳細については次節で述べる。

つぎに、ドゥルーズの哲学の方法論的な特徴を確認しておこう。

> […] われわれはいまや、哲学史の活用法という問いを立てることができる。われわれには、哲学史は、絵画におけるコラージュに十分比される役割を果たすべきように思われる。哲学史とは、哲学そのものの再生産である。哲学史上の報告は、正真正銘の分身のように作用し、それに固有の最大限の変容を含まなければならない[14]。

ドゥルーズは、画面に異質なものを貼り付けて新たな作品を作る（「コラージュ」する）画家のように、哲学史やその他諸領域の、相互に異質な文脈を圧縮して一つの新たな概念を作る。また、哲学史の記述を大きく変化させ（「再生産」）、哲学者たちの「分身」を描きながら自らの哲学を展開する。本稿の課題は、〈理念〉の概念が形成されるにあたって、ライプニッツが他の素材とともにどのように「コラージュ」されているのかを解きほぐし、この哲学者についていかなる「分身」が描かれているのかを突き止めることで、ライプニッツ哲学の「活用法」（utilisation）を浮き彫りにすることである。

1. 超越論的な〈理念〉――非本質的なものの領域

さて、『差異と反復』の提示する議論は一般にどのような問題系にかかわるのだろうか。アルノー・ブアニシュは、少なくとも「ジル・ドゥルーズの著作の初期にあっては議論の余地なく存在論的な関心がある」[15] と指摘する。また鈴木は、ドゥルーズの哲学体系について「事象がそこから生起する創造の母胎・事象の生起のメカニズム・その生起を実現する媒介者、この三つ組みが全体の大枠である。この枠組み自体は、世界・世界成立の条件・両者の媒体という哲学的思考一般にしばしば見られるもの」[16] であるとする。要するにドゥルーズの哲学は、存在者の総体（世界）の一般的な存在の在り方を問う存在論なのである。

鈴木はさらに、「ドゥルーズの哲学は一貫して超越論的哲学である」[17] とも指摘する。カントに由来する「超越論的な」という語は一般に、「経験的なものと対照をなすもの」であり、「経験的な所与」の「ア・プリオリな条件」を指す[18]。ドゥルーズの哲学は一般に、所与の世界と、その世界が成立するための条件となる次元とを区別し、前者が後者からどのように発生するのかを記述しようとしているのだ。そして、本稿で扱う『差異と反復』の〈理念〉（Idée）もまた、「世界成立の条件」を指す概念である。「〈理念〉とは、経験的で現働的な所与の総体ではなく、潜在的な平面上に広げられた超越論的な諸条件がそこに位置づけられる、感性的な経験の彼方を指す」[19]（ブアニシュ）のである。つまり、超越論的〈理念〉とは、経験的に与えられた「世界」に権利上先立って、その世界がどのような条件のもと成立するのかを規定する次元のことである[20]。ただし、ドゥルーズの超越論的な哲学は、カントやフッサールといった従来の超越論的哲学と明らかに異なった性格をもつ。『差異と反復』の冒頭には「われわれは、個体化が非人称的で、特異性が前個体的な世界があると信じる」[21] と宣言されていることから、ドゥルーズが超越論的な次元を「非人称的」で「前個体的な」領域として構想している、という見込みをあらかじめ述べておこう。

『差異と反復』における超越論的〈理念〉は、数学、生物学、言語学、社会・経済など、さまざまな領域ごとに設定されながらも、相互に共存し、浸透しあっている[22]。また〈理念〉は、「構造」、「問題」、「潜在的なもの」などとも定義され[23]、ここにはプラトン、カント、ライプニッツ等に由来する哲学的な諸要素がコラージュされている[24]。ライプニッツの場合一つとっても、〈理念〉の各定義に関連してさまざまな活用がなされているが、本稿では、まず本節で「非本質的なものの領域」であるという〈理念〉の一般的特徴を扱い、3 節で〈理念〉一般を構成する方法である「副次的言説」（vice-diction）の概念を扱うことにする。

〈理念〉は全くもって本質ではない。問題は、〈理念〉の対象である限り、定理的な本質とい

うより、もろもろの出来事や、変状、偶有性の側にある。[…] したがって、〈理念〉の領域は、非本質的なものなのである[25]。

〈理念〉とは、「非本質的なもの」(l'inessentiel)、あるいは「出来事」(événements)、「偶有性」(accidents) の領域である[26]。非本質的なものは、出来事や偶有性と換言されているが、この偶有性という語からは、「本質／偶有性」の対概念が想起される。アリストテレスは、「本質はその説明方式 [概念] が定義であるもののみにある」とし、それを「類の種」であるとした[27]。たとえば、動物という類に属す二本足の種が人間である。このとき「二本足の動物であること」が人間の定義 (本質) である。この定義＝本質は、人間であるためには必然的であり、全ての人間に該当する普遍的なものである。それに対して、偶有性は、「色が白い」といった偶然的な性質であり、そうでないことも十分ありうるものである[28]。以下の一節では、そうした非本質的なもの＝偶有性の在り方がより具体的に語られている。

> […]「どれくらい」、「どのように」、「どのような場合に」[…] これらの問いは、偶有性の、出来事の、多様性の […] 問いであり、本質の問いに […] 抗う[29]。

非本質的なもの＝偶有性とは、「どれくらい」、「どのように」といった問いに対応するような、出来事の個別具体的な様態やニュアンスのことである。そして、「問題ないし〈理念〉そのものを規定することになるやいなや、[…] とは何か？ (*Qu'est-ce que?*)、という問いは、[…] どのくらい、どのように、どのような場合に、という問いに取って代わる」[30] とされるように、ドゥルーズの〈理念〉は、「とは何か?」という問いに対応する一つの本質ではなく、「どのくらい」、「どのように」といった問いに対応する多様な偶有性を規定する領域なのである。

2. 『差異と反復』におけるライプニッツ哲学への参照

『差異と反復』では、このように〈理念〉が非本質的なものの領域とされるとともに、「ライプニッツは […] 諸現象に関しては、非本質的なものから出発する」[31] ともされる。これらの記述を照らし合わせるならば、非本質的なものとは、「〈理念〉についての着想」がライプニッツに帰されている理由 (の一端) を解明する手がかりとなろう。

それでは、非本質的なものという語で、ライプニッツのどのような議論が念頭に置かれているのか。手がかりとなるのは、「完璧な個体概念 (notions individuelles entières) として理解される諸本質」、また「これら完璧な諸概念 (モナド)」[32] という表現である。よく知られたモナド

（個体）の概念は、ここで「本質」に対応させられている。またドゥルーズによれば、「非本質的なものは、［…］諸本質そのものがそこから最終的に作られてくるところの最も深いものを指し示している」[33] とされる。したがって、非本質的なものとは、「諸本質」＝モナドを構成するものに対応している。では、モナドを構成するものとは何であろうか。それを明らかにすべくライプニッツ哲学に立ち戻ることにしよう。

『差異と反復』第 1 章には、ライプニッツ哲学を要約するような一節がある。

> 世界は、あらゆるモナドによってともに表出されているものとして、それらの表出に先立って実在している。とはいえ、世界は、世界を表出しているものの外には、モナドたち自身の外には実在しないということもまた真である。［…］この意味で、（ライプニッツが、アルノーに宛てた書簡の中でたえず注意を喚起しているように）おのおのの主語における述語の内属は、あらゆる主語によって表出される世界の共可能性を前提としているのだ[34]。〔引用 1〕

引用 1 では、①「モナド」（Monade）、②「おのおのの主語における述語の内属」（l’inhérence des prédicats dans chaque sujets）、③「表出する」（exprimer）、④「共可能性」（compossibilité）の四つがライプニッツ哲学の代表的な概念として言及されている。モナドを構成する非本質的なものに相当する着想がどこに見受けられるのかに注意しつつ、これらの概要を簡潔に確認しよう。

まずはモナド（①）である。ドゥルーズは「個体概念」（notions individuelles）という語も用いていたが、これはライプニッツの「個体概念」（notion individuelle）のことであろう（『モナドロジー』（1714 年）などで用いられる「モナド」と、『形而上学叙説』（1686 年）や、『叙説』を機縁に交わされた『アルノー宛書簡』（1686–90 年）で用いられる「個体概念」とは、2000 年代のミシェル・フィシャンの研究以降区別されるようになったが[35]、ドゥルーズは特に両者を区別していない）。この場合の個体とは、たとえば「球という形態」のみを定義する「球一般」ではなく、「アルキメデスが自身の墓に置かせたという球」といった、実際に存在する個別具体的な存在者を指す。ライプニッツはこうした個体をそのまま定義しうる概念を「個体概念」と呼ぶ[36]。

個体概念とはまた、「複数の述語が、ある一つの同じ主語に帰され、この主語が他のいかなる主語にももはや帰されないとき、その主語は個体的実体と呼ばれる」[37] とあるように、自らを主語とする複数の述語を帰属させる実体である。そして、「この［各実体の］観念は、すでにあらゆる述語ないしは出来事をうちにこめて、宇宙全体を表出するのであるから［…］」[38] といっ

た一節から分かるように、述語と出来事は同じものとして扱われている[39]。これが②の「主語における述語の内属」である。結論を先取りするならば、非本質的なものの着想に相当するのは、まさしく個体的実体が含むこれら述語＝出来事なのである。どういうことか。「必然的であるか偶然的であるかを問わず［…］述語の概念はいわばつねに［…］主語の概念の中に含まれている」[40] とされるように、個体には「偶然的真理」を表す述語が含まれている。このとき、「必然的真理」が、「その反対が矛盾を含意する」（たとえば「幾何学的真理」）ものであるのに対して、「偶然的真理」とは「その反対が矛盾を含意しない」ものである[41]。そして「個体的実体の諸概念は［…］偶然的ないし事実の真理、そしてさまざまな時間や場所その他の個別的諸状況を包み込んでいる」[42] とあるように、偶然的真理を含むとは、個体の身に起こる出来事の一切や、その出来事にともなうあらゆる時空的状況を個体が含むということだ。たとえば「カエサル」という個体には、「終身独裁官となり、共和国の支配者になる」という述語が含まれている[43]。この述語は、その反対（「終身独裁官ではない」）が歴史の状況次第でありえたかもしれないので、偶然的真理である。同様のことは、カエサルがいつ、どこで、これこれのことをした、というごく軽微な出来事や状況の全てにも当てはまるはずだ。だからこそ、非本質的なものとは、個体を構成するもろもろの述語ないし出来事なのである。

以上のことはまた、「個体的実体の概念は、自身のあらゆる出来事や規定を、通俗的にはいわゆる外的とみなされる（つまり、事物の普遍的結合のおかげで［…］初めて実体に帰属するような）規定さえもうちにこめている」[44] とも換言される。「いわゆる外的な」の意味合いについて、ライプニッツと同時代の『ポール・ロワイヤル論理学』（1662 年）を参考にしてみよう。そこには、「外的と呼びうる様態があるが、そう呼びうるのは、それらが、愛される、見られる、欲望される、といった、他者の行動によってとられた名であり、実体のうちにないなにかによってとられたものであるからだ」[45] とある。つまり、外的規定とは「実体のうちにない」ものによる規定のことである。アンドレ・ラランドはこの一節を引用しつつ、「外的：存在の本質に、または当該の観念の定義に含まれないもの」[46] と定義しているが、要するに、外的規定とは「本質」ではないものである。個体はそれにとって非本質的な「外的規定」に相当する述語すらも含む、ということからも、個体が含む述語が「非本質的なもの」（偶有性）であることが分かるのである。このように、非本質的なもの＝偶有性＝出来事は、個体が包含するとされるあらゆる偶然的真理としての述語＝出来事と明らかに対応しているのだ。

そして、個体がいわゆる外的規定すらも含むこと、それは他の存在者との関係をも述語として含むことであり、これは「つまり、事物の普遍的結合のおかげで［…］実体に帰属する」規定をも含むことを意味する。「完足的な個体概念は、私の考えでは、諸事物の全系列との関係を包

み込んでいるものです」[47] という一節を挙げてもいい。では、ここでいう「事物の普遍的結合」や「諸事物の全系列」とは何であろうか。スミスの説明を引こう。アダムが「罪を犯す」という出来事を例にとるなら、それに先行する出来事を、「罪人アダムから誘惑者エヴァへ、エヴァから邪悪な蛇へ、邪悪な蛇から禁断の木の実へ」と遡ったり、堕罪の帰結を辿って「アダムの罪とキリストの受肉と贖罪との間に直接的な関係があることを示す」こともできる[48]。アダムが罪を犯すとは、より正確には「邪悪な蛇に唆された妻のエヴァに誘惑されたために、その後キリストによって贖われることになる罪を犯す」という出来事である。このように、どんな出来事も他の出来事との連鎖の中にあり、それをたどっていけばあらゆる出来事と結合しているということが「事物の普遍的結合」の謂である。それゆえに、「個体的実体はそのうちに、この宇宙を構成する事象ないし諸モナドの集合を、それら［モナド］を相互に結び合わせる［…］諸関係の総体を包み込んでいるにちがいない」（マルシャル・ゲルー）[49] のである。また他のテクストには、「世界という名称で私が理解しているものは、今後未来に至るまでを含めて永遠に進行する諸事物の系列（seriem）の全体のことです」[50] ともある。「諸事物の系列の全体」とは、「諸事物の全系列」と同義であろう。世界は出来事の連鎖（系列）の集合なのであるから、個体がそれらを含むことは、世界全体を含むことに等しい。よって、個体概念が「完足的」（complète）であるとは、このように、個体概念が世界全体とのあらゆる関係までも含んだ、自らにまつわる一切の偶有性について完全に規定されているということだ[51]。非本質的なものによって本質（モナド＝個体）が構成されるというドゥルーズの記述は、個体が、非本質的なもの＝偶然的真理の総体を含むことで「完足的に」定義されることに対応するといえよう。

このように、ある個体が世界全体を含むという事態こそが、個体が世界を「表出する」（③）ことである[52]。そして、個体が完足的に規定されている以上は、個体が表出する世界の方も完足的に規定されている。ライプニッツは「原因あるいは少なくとも規定の理由、つまり、それがなぜ実在しないのではなくむしろ実在するのか、そしてそれが他のいかなる仕方によるのでもなくそのようであるのかをア・プリオリに説明しうるような何かなしには、何物も生じない」[53] とする。この「規定する理由」とは、「十分な理由［充足理由］」（raison suffisante）とも呼ばれる[54]。そうした理由なしには「何物も生じない」とあるが、「充足理由は、偶然的ないし事実の真理、すなわち被造物の世界に遍くいきわたった事物の連鎖のうちにも見出されるはずだ」[55] ともされており、世界に生じるあらゆる出来事が、どんなに些細なことも含め、他ならぬそのような出来事として生じるよう規定されていることが分かる。それゆえ、充足理由の原理によって、世界に起こるあらゆる偶然的真理としての出来事は遺漏なく規定されている。非本質的なもの（偶有性）の領域＝〈理念〉は、偶然的真理に対応する（非本質的な）出来事＝述語の総体を、

充足理由によって規定された世界とみなすというライプニッツ的な着想を下敷きにしているのである。このように、ドゥルーズの超越論的な〈理念〉とは、主語になるような個体の単位で規定するのではなく、個体を構成する述語＝出来事、多様な偶有性の方を規定するという点においてまさに「前個体的」で「非人称的」な次元なのである（そして、この点でドゥルーズの超越論的哲学は、カントの「超越論的主観性」やフッサールの「超越論的統覚」のような「主体」と結びついた従来の超越論的哲学とは決定的に異なる）。

さて、充足理由によって規定された世界は、複数個想定されている。「共可能性」（④）はこの点にかかわる。この概念は、論考「二十四の命題」（1690 年）や「事物の根本的起源について」（1697 年）で、世界が実在するようになる過程を説明する際に用いられる。ライプニッツによれば、現に実在するこの世界の事物以外にも、「全ての可能なものが**実在しようとしている（Existiturire）**」が、「可能的なもののうちには相互に非整合的なもの（incompatibilia）もあるので、ある可能なものは存在に至らないという帰結になる」とされる[56]。同様のことは、「可能なものが全て共可能的（compossibilia）であるのでもない限り、全ての可能なものが実在するという帰結にはならない」[57] と換言される。また、可能的なものが「無限に多くの可能な諸集成と諸系列（conbinationibus seriebusque）[58] を成しているともされる。よって、これらを整理すると、「共可能」であるとは、「全ての可能なもの」のうち、「相互に非整合的」ではない（＝相互に整合している）「可能なもの」同士の関係だということになる。「諸集成と諸系列」という表現の方は、世界を構成する諸事物の系列の総体を指すといえよう。それゆえ、共可能的なもの同士の「諸集成と諸系列」とは、「世界」とおおむね同義である。一つの世界の中の出来事は、みな相互に整合的（共可能的）なのである。そして、こうした世界一つ一つは、『弁神論』（1710 年）などにあるように、「可能世界」（mondes possibles）[59] と呼ばれるが、『アルノー宛書簡』の一節からは、こうした複数の可能世界が相互に排他的（非共可能的）だということが窺える。

> ［…］アダムには完足的な概念を割り当てるべきで、それは、彼に属しうる一切がそこから抽出されるほどに完足的でなければなりません。［…］したがってまた、もし私たちの［宇宙の］アダムが別の出来事をもったとしたら、それは別のものだ、ということになります。［…］実際はあらゆる事物が結び付いているのですから、ほんの些細なことが異なったならば、宇宙のことごとくは全く別のものとなり、最初から別の世界だったということになります。［…］神がこのような事物の連鎖を含むこの可能的宇宙を選択したのちには、出来事は必然ではあるが、確実だと言えるでしょう[60]。

あらゆる個体は、その身に起こる全ての出来事を述語として包含し、全世界を表出しているのであった。裏を返せば、一つの個体、あるいは個体が表出する世界に起こる出来事が遺漏なく整合的に規定されている以上は、整合的に規定されていない出来事はその個体や世界からは排除される。とはいえそうした出来事は偶然的真理であるかぎり、先述の通りその反対命題が可能性として認められている。つまり、そうした出来事は、ある可能世界の一切の出来事と共可能的でないだけで、他の可能世界では可能なのである。それゆえ、たとえばアダムがあるとき、どこかでまばたきをしたのか、していないのか、といった「ほんの些細なこと」(la moindre chose)の成り行きが異なるだけで、二つの個体が所属する世界は別の「可能的宇宙」(別の可能世界)に属していることになろう。ただし、ライプニッツにあって「神は諸事物の無数の可能的な諸系列の中から最善のものを選んだのであり、それゆえ、その最善の系列は実在しているこの系列なのだとも言わねばならない」[61] とされる以上、複数の可能世界の中から実際に創造されて実現する世界は、現に実在するこの世界となる。

3. 副次的言説または特異点の配分——可能世界と〈理念〉の構成

〈理念〉がライプニッツ哲学に負うものは、前節で述べたような非本質的なものについての着想にとどまらない。本節では、ライプニッツ哲学の要約的記述の中で挙げられる「副次的言説という手順」[62] に着目する。この概念については、「ライプニッツほど充足理由の探求で先に進んだものはいない。[…] また彼ほどに〈理念〉における副次的言説の運動に十分近づいた者はいない」[63] とされるように、それがライプニッツに特権的に帰されていることは間違いない。しかし、ドゥルーズの造語であるこの概念がなぜライプニッツ的とされるのかについて、明確な説明はない。その理由の解明にあたり、まずはこの概念の定義を確認しよう。

> 副次的言説こそが、〈理念〉における顕著な点の配分を司り、またある一つの系列が、もろもろの正則点の上で、ある特異点から他の特異点へと延長されるべき仕方を決定し、さらに〈理念〉において獲得された諸系列が収束するか発散するかを規定するのだ[64]。〔引用 2〕

> […]〈理念〉の特徴としての判明なものは、まさに通常のものと顕著なもの、特異なものと正則なものを配分することにあり、もろもろの正則点の上で特異点を別の特異点の近傍にまで延長することにある[65]。〔引用 3〕

副次的言説とは、〈理念〉にあって「顕著な点」(points remarquables)ないし「特異点」(points

singuliers）を配分する過程である。用語の整理をすると、引用 3 に見られる一連の対句から、「顕著なもの」、「特異なもの」、「特異点」はほぼ同義とみてよい。また、これらの対義概念は、「通常のもの」（l’ordinaire）、「正則点」（points réguliers）である。

特異点とは元来、微分に関連した数学用語である。サイモン・ダフィによれば、「微分的関係は、特異点ないしは特異性の数と配分を規定することで、まず曲線の概形を規定するために用いられるが、特異点ないし特異性とは、曲線の形がその振る舞いを変える、あるいは変化させるような結び目の点として定義される」[66]。ドゥルーズ自身は、『差異と反復』の前年（1967 年）の論文「何を構造主義として認めるか」で、「たとえば三角形は三つの特異点をもつ」[67] としている。たしかに三角形の形状は、三つの頂点を境に三つの辺が折れ曲がることで規定される。つまり、特異点（三つの頂点）とは図形の形状において変化を決定づけている点であり、そのことによって図形の形状全体を規定する点である[68]。

ただし『差異と反復』では、「われわれは、「特異なそして顕著な点」［…］といった表現に、数学的な隠喩を見出してはならない」[69] とされる。これは、特異点の概念を、数学的な意味合いに還元されないかたちで用いている、ということを表明したものであろう。というのもこの概念は、シャルル・ペギーの『クリオ』（1919 年）の一節の引用を通して新たに語り直されているからだ。引用は、作品中、歴史の女神クリオが主人公に、歴史には「平坦な時期」と「臨界点」があると語り聞かせる場面のものである[70]。臨界点とは、「結末が見えなかった問題、出口なき問題、世間の人々がぶち当たっていた問題がもはや存在しないということが突然分かる」[71] 地点である。そのとき「そして世界全体は、いわば物理的な危機の点［臨界点］を通過してしまう。温度に関するさまざまな臨界点、たとえば、融点、沸点、凝縮点、凝固点、結晶点があるように、出来事のさまざまな臨界点があるのだ」[72] とされ、この引用について「ペギーは彼の出来事についての驚嘆すべき描写において［…］こうした顕著な点を［…］産出する垂直な線を配置した」[73] と評されている。つまり、特異点（顕著な点）は、数学的な原義を超えて（つまり、図形の形状のみならず）、物質の様態であれ、歴史であれ、何らかの全体像を変える決定的な出来事（「臨界点」）とされているのである。

このように、特異点と正則点とはライプニッツ哲学に直接の起源をもつ概念ではないが、以下の一節をみるならば、ドゥルーズがそれらをライプニッツの文脈に結び付けていることが分かる。

> ［…］重要さと非－重要さという諸概念が、まさに出来事、偶有性にかかわる諸概念ではないのかどうかを、本質と偶有性それ自身との粗雑な対立よりもより一層「重要」で、偶有

> 性の懐にある概念ではないのかどうかを知ることが何よりも問われている。思考の問題は本質ではなく、重要であるものとそうでないものの評価、特異なものと正則なものとの、顕著なものと通常のものとの配分に結びついているのだ。この配分は、非本質的なものにおいて［…］ある「問題」の諸条件を構成する〈理念〉的な出来事に関してなされる[74]。

ここでは、特異点／正則点の対が、さらに「重要さ／非－重要さ」（「重要なもの／そうでないもの」）と換言されている。そして、この対概念が偶有性に属する（「懐にある」）とされている。特異点（重要なもの）／正則点（重要でないもの）の配分がなされるのは、〈理念〉という偶有性＝非本質的なものの領域においてなのだ。つまり、特異点と正則点とは、非本質的な偶有性＝出来事であり、ライプニッツの文脈で言えば、充足理由によって規定される出来事＝述語に相当する。そうした出来事のなかでも、特異点が重要なものとされているのは、図形や歴史といった何かの振る舞いを変える決定的な出来事である、というすでに確認した定義にも呼応する。また、正則点（通常のもの）の方は、重要でないものとされていることから、そうした変化が起こらない地点（ペギーの引用中の「平坦な時期」）に対応していることが分かる。また、その数と配分によって図形の概形を規定するという特異点の元来の意味合いも重ねられているのであるから、非本質的な出来事を特異点と正則点とに配分すること（副次的言説）は、非本質的なものの領域である〈理念〉の概形を規定することを意味するといえよう。要するに、副次的言説とは〈理念〉の構成法なのである。

以上を踏まえ、副次的言説の内実を明らかにしよう。引用 2 に戻ると、「ある一つの系列が、もろもろの正則点を通って、ある特異点からもう一つの特異点へと延長される」とあった。配分とは、一連の出来事からなる系列を複数の特異点と結びつける（「延長」）ことである。これに近い記述は、ライプニッツ哲学の要約的記述にも見受けられ、引用 1 の直後には「おのおのの世界にとって、一つの顕著な点［特異点］の周囲に収束する一つの系列は、他のもろもろの顕著な点の周囲に収束する他の諸系列に向かって、四方八方に延長していくことができる」[75] とあり、引用 2 と表現は異なるが、やはり系列が特異点と結びつけられるとされている。そして、ここでの「おのおのの世界」とはむろん可能世界のことであり、「系列」（séries）についても、先述の通りライプニッツの語法に同様のものが見られた。こうしたことからも、副次的言説とは、非本質的なものの領域である〈理念〉を構成する方法であるとともに、おなじく非本質的な出来事の諸系列の集合である一つの可能世界が構成される方法でもあると言える。

議論を分かりやすくするため、副次的言説の方法をライプニッツの可能世界に即して例示してみよう。まず、アダムが罪を犯し、カエサルがルビコン川を渡るという可能世界を想定した

い。この世界では「アダムが罪を犯す」という出来事は、そうでない場合にはこの可能世界の形を変えてしまう重要な出来事＝特異点である（もしアダムが罪を犯さなければ、アダムが罪を犯さないという他の可能世界になってしまう）。同様に、「カエサルはルビコン川を渡る」という出来事も特異点である。先述の通り、この二つの特異点の間には、最初の人間アダムからその子孫の一人であるカエサルまでに多くの人々が介在しているように、出来事の連鎖（「系列」）が生じている（これらの出来事が正則点に相当するだろう）。当然これらの特異点の他にも、この世界には無数の出来事が何らかの系列の一部をなして存在する。系列が「四方八方に」延長できるとは、ライプニッツ的な文脈では、この可能世界におけるどの系列のどの出来事も、アダムの堕落、あるいはカエサルの渡河という特異点と何らかの関係をもって連鎖しているということだ（すでに見た「事物の普遍的結合」を想起しよう）。ある系列が、特異点の間を「延長させられる」（prolongée）とは、このように、神が複数の特異点の間に無数の出来事を連鎖させて一つの可能世界を構成することを念頭に置いているだろう。

このようにドゥルーズは、特異点の概念を、何らかの全体像を規定するものとして拡張的に再定義したうえでライプニッツにコラージュし、神による可能世界の構成の手順を仔細に描いている。出来事の系列という線状的なものが、特異点を結節点にして延長され、一つの布置が描かれていくというイメージを描きつつ、可能世界の概形が構成される（他の可能世界との区別がなされる）過程を再説しているのだ。そして、その構成法に副次的言説という名を与えつつ、ドゥルーズ自身の〈理念〉の構成法を説明する概念にも応用しているのである。

4. 〈理念〉の変形――骰子の一振り・諸系列の発散

ドゥルーズの〈理念〉とライプニッツの可能世界は、副次的言説によって特異点を配分されることでその布置が描かれている。だが、両者には大きな相違がある。可能世界は、充足理由によってその世界のあらゆる出来事がひとたび規定されたならば（ドゥルーズ的に言えば、特異点を配分されたならば）変えられることがないのに対して、〈理念〉の布置は、「骰子の一振り」（le coup de dés）によってたえず変形されるのである[76]。

> 骰子の一振りは、[…] 一つの構造の構成要因的な諸特異点の配分を操作することである[77]。

先述の通り、〈理念〉は構造とも定義されており、この一節は〈理念〉についてのものとみてよい。「操作する」（opère）の意味が分かりづらいが、「何を構造主義として認めるか」では、より端的に「つねに再び骰子を振り出しては、[…] 諸特異性を再配分する（redistribuer）力」[78] とい

う表現がある。つまり、骰子の一振りとは、特異点の配分を変えることで、〈理念〉（構造）の布置、概形を変えてしまうことを意味する。このとき、「骰子の一振りは、［…］一回で偶然を肯定するのであり、骰子振りのおのおのが、そのつど、偶然の全体を肯定する」[79] とされる。つまり、骰子の一振りによる特異点の再配分の仕方、〈理念〉の布置の再構成は偶然に委ねられている。ドゥルーズの超越論的〈理念〉はこうして、「つねに再び骰子」を振られるために、全く新しいものへとたえず変形するのである。

再び引用 2 を参照されたい。副次的言説において延長される諸系列は、「発散する」（divergentes）か「収束する」（convergentes）か、のどちらかであるとされていた。この相違は、まさしくたえず変形するドゥルーズの〈理念〉とライプニッツの不変の可能世界の対比に対応している。

> ライプニッツの唯一の誤り、それは、諸系列を収束という条件に結びつけ、発散そのものが肯定の対象だということ、あるいは非共可能性が［…］肯定されることが分からなかったために、差異を制限という否定的なものに結びつけたことではないだろうか[80]。

一つの可能世界からは、その世界の出来事と非共可能的な出来事は排除されていたのであり、ライプニッツが批判されるのはこの点である。上の一節で「発散の肯定」は「非共可能性の肯定」と並置されており、さらに「諸世界の非共可能性は、獲得された諸系列を発散させるような諸々の［特異］点の周囲で定義される」[81] とされている。つまり、系列の発散とは、ある系列をそれとは非共可能的な特異点へと延長させることを意味する。アダムが罪を犯す世界ならば、その世界のある系列を、「アダムが罪を犯す」という特異点から分岐（diverger）させ、異なる可能世界に属すはずの「アダムが罪を犯さない」という特異点へと延長させるということだ。反対に、ライプニッツの可能世界にあっては、アダムが罪を犯すという特異点は、その可能世界を構成するようなあらゆる出来事と（ただし、それらとのみ）共可能的であった。このことが、あらゆる出来事の系列がその特異点の周囲に収束するというイメージで再説されている。

骰子の一振りとは、〈理念〉の布置を全く新しいものへと再配分すること、そうすることで偶然を肯定することだった。同じように、「偶然が肯定されるや、発散そのものが［…］肯定の対象となる」[82] とされる。発散＝非共可能的なものの肯定は、骰子の一振りによる偶然の肯定と連動しているのだ。アダムの系列が、「罪を犯す」から「罪を犯さない」へと分岐［発散］するとき、アダムが罪を犯す可能世界における特異点の布置は当然変化する（＝骰子が振られている）はずだからである。つまり、そこではアダムが罪を犯さないような可能世界への変形がなされる。その出来事の有無によって可能世界を相違させる（＝特異点となる）分岐点は無数にあ

りうるが、これら一々についてそのつど全く異なった他の可能世界への変形があることが保証されているのだ[83]。このように、非共可能的なものの肯定もまた、〈理念〉が全く新しいものへと変形していくことの肯定であり、諸系列を発散させる方の副次的言説は、事実上、骰子の一振りのことであるといえる。

こうした発散［分岐］のイメージは、ボルヘスの小説「八岐の園」（1941 年）とコラージュされることでより一層精彩を与えられる。

> ［…］崔奔（サイベン）のフィクションで、彼は全てを採るのです――同時に。彼はそのようにして多様な未来、増殖して枝分かれするさまざまな時間を創造する。ここから、小説の矛盾が生じます。憑（ファン）がたとえばある秘密を保持している。ある見知らぬ男が戸を叩く。憑はそいつを殺そうと決める。当然さまざまな結末が可能です。憑が侵入者を殺すこともできるし、侵入者が憑を殺すこともできるし、二人とも助かることも、二人とも死ぬこと等々もありうるのです。崔奔の作品では、全ての結末が可能なのです。おのおのの結末が、他の分枝のための起点となるのです[84]。

「八岐の園」とはこの小説の題名であるだけでなく、この小説の主人公愈存（ユソン）の祖先である崔奔が書いた謎の小説の題名でもある。上の引用は、愈存に、この小説を研究する中国学者スティーブン・アルバートが小説の内容の解題をしている場面である。アルバートによればこの小説は、崔奔が構想していた時間についての哲学的考察に基づいており、崔奔は、「あらゆる可能性」を孕んだ「時間の無限の系列（séries）」、「発散し（divergent）、収束し（convergent）、並行している複数の時間の、増大していく目も眩むような網の目」の存在を信じて、それを小説中で描いているという[85]。この小説では、登場人物である憑が迫り来る「侵入者」に対峙するとき、侵入者を殺す、侵入者に殺される、双方殺し合う、といった相互に相容れずに「枝分かれする」（bifurquent）あらゆる「結末」が共存している。こうしたイメージが、非共可能的な出来事が共存する事態の例として引用されていることは疑いない。また、ライプニッツの可能世界論を再説する際に用いられていた「系列」、「発散する」（「枝分かれする」もほぼ同義であろう）、「収束する」といった語が上の引用に見られることからも、これらの語を蝶番として、ボルヘスがライプニッツの可能世界論の文脈へと接続されていることは明らかである。

以上を踏まえれば、骰子の一振りによる〈理念〉の変形が（ボルヘスの一節を介して）、諸系列の発散、すなわちあらゆる非共可能的な出来事の共存というイメージによって上書きされていることが分かるだろう。ドゥルーズはライプニッツの可能世界論に単に限界を見出すのでは

ない。共可能ではない、つまり相互に整合的ではない出来事もある、というライプニッツの記述から敷衍して、ドゥルーズは非共可能性という概念を前景化し、そこに諸系列の発散というイメージを介在させる。かくして可能世界論は、骰子の一振りによる〈理念〉の変形を例示するものとして「活用」されているのだ。『差異と反復』の「結論」では、「発散についての彼［ライプニッツ］の予感」[86] という肯定的な表現がなされているが、発散する可能世界を「予感」するライプニッツこそは、ドゥルーズが自らの哲学のために生み出した「分身」なのである。

5. 副次的言説と矛盾

ところで、可能世界（と〈理念〉）の構成法は、なぜ「副次的言説」（vice-diction）と呼ばれるのだろうか。本節ではこの奇妙な造語の含意について触れておこう。財津理はドゥルーズ本人から得た教示に基づき、「vice とは例えば、vice-amiral（海軍中将、直訳するなら、副－海軍大将）の vice（副）の意。この vice という接頭辞とヘーゲルにおける contradiction（矛盾）とを合成して造ったもの。［…］厳密な意味は、à la place de contradiction（矛盾の代わりに）である」[87] と解説している。ヘーゲル（矛盾）とライプニッツ（副次的言説）の対比は、『差異と反復』の重要な主題である、いかなる同一性も前提としない〈それ自体における差異〉の探求、哲学からの「否定性」の排除、ドゥルーズの徹底した反ヘーゲル主義といった問題系と密接に結びつけられた形で設定されているが、ここでは本稿にかかわる限りで簡潔に触れるにとどめる。

ライプニッツに帰される副次的言説とは非本質的なものである出来事（特異点／正則点）の配分であったのに対して、「ヘーゲルは類の本質から出発する」[88] とされたり、「ヘーゲルは［…］とは何か？、という問いを真に受けた長い伝統の到達点だ」[89] とされる。ヘーゲルの矛盾とはもちろん弁証法の運動の原理のことだが、ドゥルーズの意を汲み取るならば、一般に弁証法にあって最初に措定される即自的なものは、「類」のようにつねにそこに属する全てのものに必然的に該当する本質だ、ということであろう。他方、類にとっての対自的な存在として想定される「種」は、「類」に属する全てのものに必然的に該当はしない非本質的なものであり、両者は矛盾をきたす。しかし、どの種も同一の類に属し、類は必ず種として実在することが明かされ、両者の矛盾は「類はそれ自身であり、そして種でもある」[90] というように止揚される。かくして、非本質的な位相に置かれた項は全て、結局は本質の同一性に含まれていたことになる。

反対に、非本質的なものが矛盾と無縁である理由は、「非共可能性の概念は［…］、決して矛盾に帰着しない」[91] という一節から窺われる。非共可能的であるとは、相互に「非整合的な」、つまりおのおの他の可能世界に配された出来事、つまり非本質的なもの同士の関係であろう。ライプニッツの定義では、偶然的真理である出来事は「その反対が矛盾しないもの」であった。

それゆえ、「アダムが罪を犯す」／「犯さない」という相互に非共可能的な出来事同士は無矛盾なのである。副次的言説は、その反対が矛盾しないものである偶然的真理（非本質的なもの）から出発する運動であることから、矛盾に「取って代わる」概念とされるのである。〈理念〉を非本質的なものの領域とするドゥルーズは「ライプニッツが［ヘーゲルよりも］「ずっと先に」進んでいないとは確信していない」[92] とする。全てを本質に回収したヘーゲルよりも、非本質的なものから出発したライプニッツの方が評価されているのだ。

おわりに

本稿では、『差異と反復』にあって超越論的な次元をなすとされる〈理念〉が、ライプニッツ的と（も）言われる所以の一端を探った。まず、非本質的なものの領域としての〈理念〉には、充足理由によってあらゆる偶有性（出来事＝述語）が規定されている世界、というライプニッツの着想が活用されているのであった。また、ライプニッツに帰されている副次的言説とは、可能世界の構成法（諸系列の収束）を再説するものであった。しかし、この着想はさらに、可能世界とは異なりたえず変形する超越論的〈理念〉を構成する方法（諸系列の発散）へと練り上げられてもいた。以上のように、ドゥルーズの〈理念〉の概念には、ライプニッツの可能世界を下敷きにしつつ、その「分身」として構想されているという側面があるのである。そしていまや、ドゥルーズの超越論的な〈理念〉の理論が、超越論哲学の起源にいるカント「以前の」ライプニッツ哲学を援用するという大胆な「哲学史の活用法」に基づいて構築されているということも理解されよう。

最後に本稿の限界と今後の課題について述べておく。本稿では、「非本質的なものの領域」としての〈理念〉のみを扱った。しかしながら、〈理念〉にはその他にもさまざまな特徴があり、〈理念〉論におけるライプニッツ哲学の活用の射程もより広範に及ぶ。本稿の議論は、ここで扱うことの叶わなかった、同一性を前提としない差異の探求という『差異と反復』の重要な主題、それに直結する「構造としての〈理念〉」の観点からも語り直さねばならないだろう。

そして、本稿でその一端を垣間見た『差異と反復』の存在論は、ライプニッツに続いてニーチェの「活用」を通して描かれていくだろう。「発散」と「骰子の一振り」によって描かれた超越論的な〈理念〉の変形とその反復という主題は、最終的に、独特のニーチェ解釈に基づいた「差異あるものの永遠回帰」の理論として構想される。ライプニッツの「唯一の誤り」（「発散」の否定）は、「ディオニュソス的〈理念〉」を「わずかの差で取り逃がしていた」[93] ことであるとも換言されるが、「発散」を「予感」したライプニッツの着想は、まさに「ディオニュソス」が示唆するニーチェとコラージュさせることで補完され、展開されるだろう。以上のような議論

は、本稿でやはり扱えなかった個体化論をはじめ、多岐にわたる問題系と連関している。これらの十全な分析は、他日を期さねばならない。

---

[1] 本研究は、JSPS 特別研究員奨励費 18J22359 の助成を受けたものである。

[2] Gilles Deleuze, *Différence et répétition*, Paris, PUF, 1968. 以下、*DR* 1 のように略号と頁数を表記する。訳出にあたっては、邦訳（『差異と反復』財津理訳、河出文庫、上・下巻、2007 年）を参照した。

[3] Deleuze, *Le pli. Leibniz et le baroque*, Paris, Minuit, 1988.

[4] Tom Conley, “Translator’s Foreword. A Plea for Leibniz”, in Deleuze, *The Fold. Leibniz and the Baroque*, Minneapolis, University of Minneapolis Press, 1993, trans. by Tom Conley, p. xiii.

[5] Daniel W. Smith, “Deleuze on Leibniz. Difference, Continuity, and the Calculus”, in Smith, *Essays on Deleuze*, Edinburgh, Edinburgh University Press, 2012, p. 43.

[6] *Ibid.*

[7] *Ibid.*, note 3, p. 372. なお、1980 年の講義はパリ第 8 大学で行われたものである。Cf. https://www.webdeleuze.com/groupes/3（2018 年 7 月 27 日閲覧）.

[8] Cf. 鹿野祐嗣「ドゥルーズの『意味の論理学』の注釈と研究――出来事、運命愛、そして永久革命」早稲田大学大学院文学研究科博士学位論文、2017 年、第 3 章 4 節。

[9] Sjoerd Van Tuinen & Niamh McDonnel, “Introduction”, in Van Tuinen & McDonnel（ed.）, *Deleuze and* The Fold. *A Critical Reader*, New York, Palgrave, 2010; Morgens Lærke, “Four Things Deleuze Learned from Leibniz”, in *Ibid.* また仏語圏の論集としては、Benoît Timmersmann（dir.）, *Perspective, Leibniz, Whitehead, Deleuze*, Paris, Vrin, 2006 がある。

[10] 鈴木泉「ドゥルーズ」、鷲田清一編『哲学の歴史 12――20 世紀 III　実存・構造・他者』中央公論新社、2008 年所収、638 頁。

[11] 『意味の論理学』におけるライプニッツ受容を扱ったものとしては、國分功一郎「特異性、出来事、共可能性――ライプニッツとドゥルーズ（1・2）」、『情況』第 3 期 5 巻 7–8 号、2004 年； Sean Bowden, “Deleuze’s Neo-Leibnizianism. Event and *The Logic of Sense*’s Static Ontological Genesis”, *Deleuze Studies*, vol. 4, Nov., 2010 があったが、決定的な注釈としては、鹿野、前掲論文（特に、第 3 章 2 節、4 節）を参照。

[12] *DR* 340.

[13] Cf. *DR* 325.「ただライプニッツのみが、思考のある論理の諸条件に近づいていたのであり、その論理はまさに、彼の個体化と表出の理論によって想を与えられていたのだ」。

[14] *DR* 4. 以下、特記しない限り下線は原文中の斜体や隔字体の強調部分に、太字は原文中の太字部分に対応している。

[15] Arnaud Bouaniche, *Deleuze. Une introduction*, Paris, La découverte, 2007, p. 56, note 2.

[16] 鈴木、前掲論文、638 頁。

[17] 同上、652 頁。

[18] Cf. André Lalande（dir.）, *Vocabulaire technique et critique de la philosophie*, Paris, PUF, 1e éd., 1926; 12e éd., 1976, p. 1145.

[19] Bouaniche, *op. cit.*, p. 115.

[20]「個体化」とは、『差異と反復』では、「強度」という超越論的な力によって、〈理念〉から経験的な世界

が生起する過程の一部をさすが、本稿では立ち入らない。

[21] *DR* 4.

[22] Cf. *DR* 241–242.

[23] Cf. *DR* 262–263; 218–219; 273.「構造」とライプニッツについて少し触れたものとしては、Antonio Gualandi, *Deleuze*, Paris, Les Belles Lettres, 2003, pp. 48–49 を、「潜在的なもの」とライプニッツに関しては、鈴木泉「潜在性の存在論――前期ドゥルーズ哲学の射程」、『情況』第 3 期 4 巻 3 号、2003 年、201–202 頁を参照のこと。

[24] たとえば、「プラトン的、ライプニッツ的、あるいはカント的な〈理念〉」（*DR* 222）という端的な表現がある。

[25] *DR* 242–243.

[26] ただし『意味の論理学』では、événements（出来事）と accidents（偶発事、偶有性）は明確に区別された概念として用いられる。Cf. Deleuze, *Logique du sens*, Paris, Minuit, 1969, p. 68.

[27] アリストテレス『形而上学』1030 a6–13（出隆訳、岩波文庫、下巻、236 頁）。

[28] Cf. 同書 1007 a30（同書、上巻、129 頁）。［　］内は訳者の補足である。

[29] *DR* 244.

[30] *DR* 243.

[31] *DR* 65–66.

[32] *DR* 68.

[33] *DR* 67.

[34] *DR* 68.

[35] Cf. Michel Fichant, « Introduction. L'invention métaphysique », in G.W. Leibniz, *Discours de métaphysique, suivi de Monadologie et autres textes*, éd. présentée et annotée par Fichant, Paris, Gallimard, 2004, pp. 135–140.

[36] Cf. Leibniz, *Sämtliche Schriften und Briefe*, Zweite Reihe, Zweiter Band, Teil A, hrsg. von der Berlin-Brandenburgischen Akademie der Wissenschaften und der Akademie der Wissenschaften in Göttingen, Akademie Verlag, 2009, S 45［*Œuvres philosophiques de Leibniz*, tome 1, avec une introduction et des notes par Paul Janet, Paris, Félix Alcan, 2e éd., 1900, p. 524］. 以下、*A*.II 45 のように略号、巻号と頁数を表記する。ドゥルーズが参照している（Cf. *DR* 68）ジャネ版に収録されているテクストに関しては、［*J*.I 524］のように併記する。また、『形而上学叙説』及び『アルノー宛書簡』に関しては、邦訳（『形而上学叙説――ライプニッツ－アルノー往復書簡』橋本由美子監訳、平凡社ライブラリー、2013 年）を参照した。その他のライプニッツのテクストの邦訳は、工作舎版『ライプニッツ著作集』を参照した。

[37] Leibniz, *Sämtliche Schriften und Briefe*, Sechste Reihe, Vierter Band, Teil B, hrsg. von der Leibniz-Forschungsstelle der Universität Münster, 1980, S 1540. 以下、*A*.VI 1540 のように略号、巻号と頁数を略記する。

[38] *A*.VI 1551. 強調引用者。

[39] ただし、形式論理学に批判的なドゥルーズは、自らの概念としては「述語」ではなく「出来事」の方を用いる。そして『意味の論理学』では、出来事は明確に「無－論理的」とされるようになる。

[40] *A*.II 80［*J*.I 541］.

[41] Cf. *A*.VI 1546–1547.

[42] Cf. *A*.II 71［*J*.I 534］.

[43] Cf. *A*.VI 1547.

[44] *A*.II 80［*J*.I 541］.

[45] Antoine Arnaud & Pierre Nicole, *La logique ou l'art de penser*, notes et postface de Charles Jourdain, coll. « Collection tel », Paris, Gallimard, p. 42. ただしライプニッツは、「通俗的には外的」とされる他の個体との関係性なども、個体に「内的」に帰属するとするため、「外的規定というものはない」と断言する。Cf. Leibniz, *Die*

philosophischen Schriften von Gottfried Wilhelm Leibniz, Band V, hrsg. von C. I. Gerhardt, Berlin, 1875–1890, reprint Olms, 1960, S. 211［*J.*I 188］. 以下、ゲルハルト版は、*GP.*V 211 のように略号、巻号と頁数を表記する。

[46] Lalande（dir.）, *op. cit.*, p. 332.

[47] *A.*II 44［*J.*I 523］.

[48] Cf. Smith, *art. cit.*, p. 51.

[49] Martial Gueroult, « La constitution de la substance chez Leibniz », *Revue de métaphysique et de morale*, n°52, 1947, p. 58.

[50] *GP.*II 362.

[51] complet は、ライプニッツ研究の慣例では「完足的な」と訳す。

[52] Cf. *A.*VI 1541.「どの個別の実体も、おのおのの仕方で宇宙全体を表出しており、また、それら実体の概念のなかには、その実体の出来事が、それにともなうあらゆる状況や、あらゆる外的なものの連鎖とともに含まれている」。

なお、表出の概念は、スピノザ論『スピノザと表現［表出］の問題』の中心的な主題でもある。この著作では、この概念がスピノザとライプニッツに共通する「根本問題」であり、いずれの場合も「デカルト主義の難点を克服する」ための着想であったとされ、両者の比較や共通点の指摘が頻繁になされる。Cf. Deleuze, *Spinoza et le problème de l'expression*, Paris, Minuit, 1968, p. 13.

[53] *GP.*VI 127［*J.*I 109］.

[54] Cf. *GP.*VI 612［*J.*I 712］.「そして充足理由の原理である。この原理によってわれわれは、充足理由なしには、いかなるものも真であったり実在すると［…］認められないと考える」。

[55] *Ibid.*

[56] Cf. *GP.*VII 289.

[57] *Ibid.*

[58] *GP.*VII 303［*J.*I 660］.

[59] Cf. *GP.*VI 362–364［*J.*II 345–348］.

[60] *A.*II 48–49［*J.*I 527–528］.

[61] *GP.*VI 445［*J.*II 425］. なお、可能世界は「神の知性」のなかで独特の仕方で存在している（「事象性」をもつ）とされる。Cf. *A.*II 51［*J.*I 530］.

[62] *DR* 340.

[63] *DR* 275.

[64] *DR* 245.

[65] *DR* 228.

[66] Simon Duffy, "Leibniz and the Concept of the Infinitesimal", in *Deleuze and the History of Mathematics*. *In Defense of the "New"*, London, Bloomsbury, 2013, p. 16.

[67] Deleuze, « À quoi reconnaît-on le structuralisme ? », in Deleuze, *L'île déserte et autres textes*. *Textes et entretiens 1953–1974*, éd. par David Lapoujade, Paris, Minuit, 2002, p. 247.

[68] 特異点の配分は、構造としての〈理念〉を構成する三つの原理のうちの一つでもあるが、本稿では詳述できない。Cf. *DR* 227–228.

[69] *DR* 246.

[70] Cf. Charles Péguy, *Clio, Dialogue de l'histoire et de l'âme païenne*, in *Œuvres en prose complètes*, tome III, éd. par Robert Burac, Paris, Gallimard, coll. « Bibliothèque de la Pléiade », 1992, pp. 1205–1206. 邦訳（シャルル・ペギー『歴史との対話――『クリオ』――』山崎庸一郎訳、中央出版社、1977 年）を参照した。

[71] *Ibid.*, p. 1208［*DR* 244］.

[72] *Ibid*［*DR* 245］.

[73] *DR* 244. 強調引用者。

[74] *DR* 245. 強調引用者。

[75] *DR* 68.

[76]「骰子の一振り」という語は、マラルメの実験的詩作品『骰子の一振りは決して偶然を廃棄することがないだろう』（*Un coup de dés jamais n'abolira le hasard*, 1897 年）の表題から借用されたものであると思われる。なお、この概念については、鹿野、前掲論文（特に序論、第 3 節）に教えられるところが大きかった。

[77] *DR* 256.

[78] Deleuze, « À quoi reconnaît-on le structuralisme ? », *art. cit.*, p. 269. なお、この論文は 1972 年に公刊されるが、冒頭で「われわれは 1967 年にいる」（p. 238）とされるように、執筆年代は 68 年の『差異と反復』とほぼ同年代であるといえよう。それゆえ、この一節を援用することも許容されるだろう。

[79] *DR* 256.

[80] *DR* 72–73.

[81] *DR* 68.

[82] *DR* 256.

[83] それゆえ、特異点／正則点の区別をライプニッツの文脈に当てはめたとき、その区別は相対的であることになろう。どんな出来事であれ、その有無に対応する二つの可能世界が比較される場合には特異点と呼ばれ、そのときそれ以外の出来事は正則点と呼ばれる。カエサルがルビコン川を渡る世界と渡らぬ世界が比較されるとき、「カエサルがルビコン川を渡る」という出来事が特異点であり、たとえば「カエサルがあるとき、どこかでまばたきをする」といった出来事が正則点であることになろう。

[84] Jorge Luis Borges, « Le jardin aux sentiers qui bifurquent », in Borges, *Fictions*, trad. de l'espagnol par Paul Verdevoye et Nestor Ibarra, Paris, Gallimard, 1951, pp. 129–130［*DR* 153］. 邦訳（ホルヘ・ルイス・ボルヘス「八岐の園」、『伝奇集』鼓直訳、岩波文庫、2015 年所収）を参照した。

[85] Cf. *Ibid.*, p. 133.

[86] *DR* 340.

[87]『差異と反復』上巻、483–484 頁、訳注 45（Cf. 財津理「解説に代えて」、同書下巻、386–387 頁）。なお、財津訳では「副次的矛盾」だが、「矛盾に取って代わる」方法を指す以上、訳語に「矛盾」を含めることは混乱を招くと考え、本稿では diction を語源のラテン語である「言うこと」（dicere）に寄せて、さしあたっては「副次的言説」と訳す。

[88] *DR* 65.

[89] *DR* 243.

[90] *DR* 65.

[91] *DR* 68.

[92] *DR* 340.

[93] Cf. *DR* 276.

Sur le leibnizianisme de Gilles Deleuze dans *Différence et répétition*: Idée, mondes possibles et vice-diction

Masatoshi IINO

Dans *Différence et répétition* (1968), Deleuze se réfère souvent à la philosophie de Leibniz. Nous remarquons que ce que Deleuze doit à Leibniz, c'est le concept de l'*Idée*. Il désigne une dimension transcendantale, qui conditionne le monde empirique. Et, effectivement, Deleuze lui-même qualifie l'Idée de leibnizienne.

Alors, pourquoi l'*Idée* est-elle leibnizienne ? À ce sujet, Deleuze, semble-t-il, ne fournit pas d'explication claire. Pourtant, nous pouvons en trouver la clef, dans la notion d'*inessentiel* : l'Idée est définie comme un domaine inessentiel, correspondant à celui des *événements*, des *accidents*, et qui renvoie aux questions telles que *comment ?*, *dans quel cas ?* etc. Cette conception dérive de la thèse leibnizienne de l'*inhérence des prédicats dans sujet*, et celle de la *raison suffisante*.

En outre, Deleuze attribue un concept obscur à Leibniz : la *vice-diction*. Elle représente le procédé de la constitution d'une Idée, ainsi que d'un monde possible. D'après Leibniz, chaque monde possible se forme avec les événements *compossibles*. Deleuze remanie cette explication à sa manière : les séries des événements *convergent* ou *divergent* au voisinage des *points singuliers* (événements importants), si bien qu'un monde possible ou une Idée est formé(e).

Malgré ces croisements profonds, les deux philosophes se divergent. Leibniz n'a considéré sa théorie des mondes possibles qu'à condition que Dieu choisisse et fasse exister seul ce monde où nous sommes, en excluant tous les autres (*incompossibles*). C'est là, selon Deleuze, « le seul tort de Leibniz ». Mais Deleuze ne se contente pas de le critiquer car il tente de développer le concept d'*incompossibilité*, en l'articulant à une fiction borgésienne, pour illustrer la doctrine de transformation de l'Idée transcendantale : *un coup de dés*. Il invoque, pour ainsi dire, un Leibniz qui aurait imaginé la coexistence de tous les mondes possibles. Précisément, il crée « une existence double » de Leibniz.